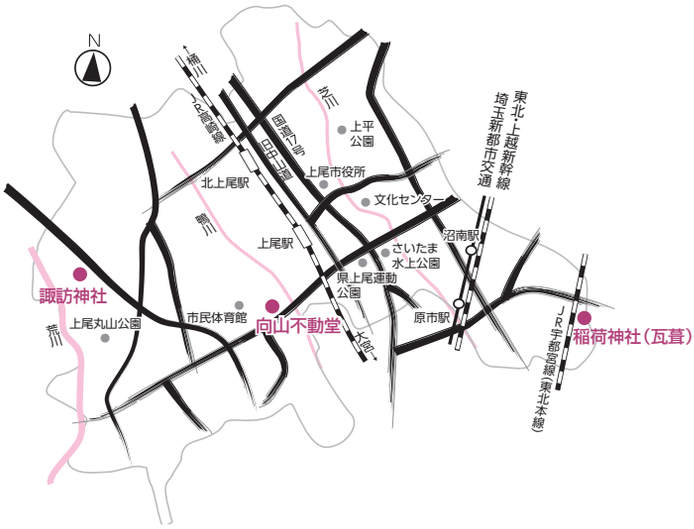
上尾に在住した宮大工 山田弥吉とその彫刻



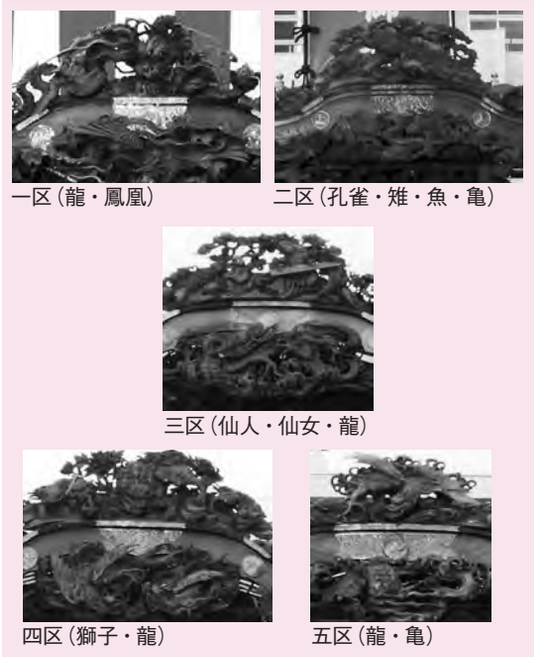

一区（龍・鳳凰）
二区（孔雀・雉・魚・亀）
三区（仙人・仙女・龍）
四区（獅子・龍）
五区（龍・亀）

写真1　原市山車彫刻の一部

明治時代になると、政府の政策による社寺の統廃合を受け、老朽化した本殿・本堂を作り直したり、新たに建築したりする社寺が多数あった。このような状況で建てられた上尾市域の社寺建築の中に、上尾を中心に活動した宮大工の山田弥吉によって施された彫刻が見られる。

弥吉は、大谷本郷村（現上尾市大谷本郷／上尾市西消防署大谷分署付近）に在住していたといわれている。弁財二丁目に所在する昌福寺の記録によると、本名は浅右衛門といい、弥吉は通称である。明治26（1893）年9月16日に49歳で亡くなったことが記されているが、その他の来歴などは不明である。

弥吉の作例は、市内では畔吉の諏訪神社本殿、向山の不動堂、瓦葺の稲荷神社本殿、原市の山車彫刻などが確認されている。彫刻の内容は、鳳凰・龍・孔雀・魚・亀・獅子・リス・ウサギなどの他、中国の故事、日本の神話を題材としている。特に、原市の山車彫刻は、第一区から第五区までの5町内が所有する山車に、見事な透かし彫りが施され、彫刻の構図が全て異なっている点が特徴である（**写真1**）。また、市外の作例では川越市の蓮馨寺の手水舎や、鴻巣市の勝願寺の本堂向拝、さいたま市岩槻区柏崎の久伊豆神社の本殿、伊奈町志久の神輿などの彫刻を手掛けている。このように弥吉は、明治初期から明治20年ごろにかけて、市内外で精力的に彫刻の制作を行っていた。

これらの彫刻には、仕事を束ねる棟梁や、棟梁を補佐する脇棟梁などと並んで、弥吉を「彫工」「彫刻人」などと刻んでいる銘がある。このことは、江戸時代以降、社寺建築の装飾が多彩になることに伴って、分業化・専業化した大工のうち、彫物を専業とする彫物大工の一人として、山田弥吉が位置付けられていたことを示している。また、弥吉は、「籠彫り」といわれる高度な彫刻技法を好んで用いている。これは、彫り出した籠の中に、さらに丸い玉を彫り抜いたもので、高い技術力が必要とされる技法である。

弥吉の周辺では、息子も彫刻制作を行うとともに、弥吉と同年代で大谷本郷村に在住して山田姓を名乗る彫刻人がいたことが分かっている。このことから、弥吉を中心とした彫工の集団が、大谷地区を中心として彫刻制作に従事していたと考えられる。

（上尾市生涯学習課）

コラム column　瓦葺の稲荷神社と彫刻

瓦葺の稲荷神社は、明治43(1910)年に八幡神社が合祀されたため、正面に稲荷神社と、稲荷神社の南西に八幡神社が鎮座している。その際、八幡神社の本殿が稲荷神社となり、稲荷神社の本殿は八幡神社となった。

稲荷神社の基壇には、明治15(1882)年に再建されたことや、発起人、寄付者、造成に関与した職人名も共に記されている。これによると、棟梁は砂村（現さいたま市）の山田市五郎、脇棟梁は瓦葺村の黒濱久次郎、木挽(木を切る職人)は藤左ヱ門と井上治兵ヱ、石工は前川岸（現戸田市）の桑原貞治郎、そして彫工は、大谷本郷村の山田弥吉である。

弥吉によって彫られた彫刻は、向拝欄間（正面の屋根の下部）に龍や獅子、本殿正面に花や鳥が彫られている（**写真2**）。また、脇障子（仕切りの板壁）には、八幡神社を象徴する応神天皇が赤子の姿で表され、応神天皇を抱く武内宿禰と、神宮皇后の彫刻がはめ込まれている。

写真2　本殿正面の花・鳥・獅子の彫刻